



Title	ソヴェエトの破片と生きる：「集団行為」の半世紀 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	生熊, 源一
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第14564号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81487
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Genichi_Ikuma_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 生 熊 源 一

審査委員 主査 准 教 授 安 達 大 輔
副査 教 授 野 町 素 己
副査 教 授 大 西 郁 夫
副査 教 授 鴻 野 わ か 菜（早稲田大学）

学位論文題名

ソヴィエトの破片と生きる：「集団行為」の半世紀

・当該研究領域における本論文の研究成果

モスクワ・コンセプチュアリズム（以下「コンセプチュアリズム」）は後期ソ連の非公式芸術の一潮流としてその重要性を認められ、国際的にも研究が蓄積されているが、日本国内での紹介や研究は散発的なものだった。本論文は、1976年の誕生後現在まで活動を続け、より若い世代のコンセプチュアリストたちに大きな影響を与えたグループ「集団行為」に焦点を当て、コンセプチュアリズムの手法と思想を歴史的な変化の中で明快に整理している。国内ではほとんど知られていない集団行為を本格的に分析しただけではなく、コンセプチュアリズムの活動を日本語で初めて体系化した研究として、画期的な意義を有するものである。

国際的な文脈では、コンセプチュアリズムはもとより集団行為についてもすでに重要な研究が提出されているが、本論文の独創性は、ソ連の公式文化に寄生する形で存在していた非公式芸術はソ連崩壊後にその存在意義を失ってしまった、という従来支配的だった見解に異議を唱えている点にある。ポストソ連期においても生き延びているソ連の記憶に向き合いながら、集団行為はなお自己形成を続けているという新しい解釈が説得的に示されている。

理論的な枠組としては、公式イデオロギーの模倣というソ連の文化を支えていたまさにその身振りが、同時に外部への脱出を図る非公式芸術を生み出したとするユルチャクのソ連文化論を、エトキントに依拠してポストソ連期の文化研究に応用するものである。ソ連の記憶が喪によってうまく消化されず、亡霊のように甦り続けるソ連崩壊後の社会・文化状況の説明としても大変優れており、ソ連とポストソ連の文化研究を接続する試みとして理論的な達成度は高い。

構成は的確に整理されている。第1部では、ファヴォルスキーによって抽象的な形で示された空虚の主題を、続くコンセプチュアリストたちがソ連の公式イデオロギー言説の内部に位置づけ、やがて外部への出口として読み替える展開に、集団行為の活動が位置づけられる。言葉の意味（第1章）、紙というメディア（第2章）、モノを活性化する行為（第3章）、それぞれの外部の探求としてコンセプチュアリズムから集団行為への発展を整理するこの箇所は、系譜への丁寧な視線とそれを辿る手法の鮮やかさにおいて感動的ですからある。第2部では、個々の生活内部の隅々にまで浸透したソ連の公式イデオロギーを、集団行為が、環境という外部として定義し直したことを詳らかにする。この活動によって、ソ連における宇宙は、社会主義リアリズムにおける自然と同じように、内部を成立させるための外部であることが可視化されたという指摘も重要である。第3部では、集団行為の営為をソ連内部における自己形成としてとらえ直すことにより、ソ連崩壊前後の集団行為の活動に連続性を見い出している。それにとどまらず、集団行為が批評的に向き合う対象が、ソ連時代には日常であり、ポストソ連においてはその記憶となったことを明確に指摘し、活動の差異にきちんと目配りがなされている。

本論文は、2018年度日本ロシア文学会賞受賞1点を含む査読付き日本語論文6点、査読付き1点を含む英語論文2点を基にしたものであり、その内容はこれまで国内外で高い評価を受けている。

・学位授与に関する委員会の所見

委員会では、本論文はロシア含め海外に通用する学術的達成として非常に高く評価された。先行研究に関しては、ソ連の非公式芸術について幅広く読み込んだ上で、情報の羅列にとどまらず独自の問題を提出している。論述は論理的かつ明快であり、集団行為のパフォーマンスを具体的に解説しながら、その世界観や本質を的確に抉出するとともに、コンセプチュアリズムの活動を多面的に描き出している。集団行為の中心人物であるモナストゥイルスキーと親交を結び、日記を含む未公刊文書にアクセスするなど、資料的な価値も大きい。

ただし、国内外の研究状況の整理やモナストゥイルスキー以外のメンバーの活動の記述、集団行為とコンセプチュアリズムの分節化については不十分な点も残る。集団行為の活動において空間の持つ意味は十全に論じられているが、時間や視覚については特定のパフォーマンスや時期との関連で扱われるのみであり、活動全体を視野に入れた論の展開を期待する声もあった。また資本主義の影響や、他の旧共産主義諸国を含む世界の現代アートとの比較を考慮に入れることで、ソ連・ポストソ連の連続性以外の新たな面も見えてくるのではないかという提案もなされた。

しかし、以上の指摘はいずれも現代的で国際的な意義を持つ本論文の重要性と幅の広さを示すものであり、今後のロシア・ソ連芸術史、さらには文化研究全般において必ず参照されるべき研究という評価は揺るぎない。審査委員会は全員一致で、生熊源一氏が博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達した。